

2024年3月3日 説教「町の書記役を用いた主」

使徒の働き 19章 31～41節

マケドニヤやアカヤに行った後には、エルサレムに戻ることを促されていたパウロは、いずれローマに行くことも示されていました。そこで、弟子たちをマケドニヤに先発させましたが、パウロ自身はしばらくエペソに残りました。ところが、この地に騒動が起きたのです。デメテリオという銀細工人が職人たちをあおって、パウロたちの教えを批判したことに端を発し、それに乗った人々がエペソのアルテミスこそ崇拜すべきだと叫び始めたのです。

1. 混乱するエペソ (31～34節)

①アジャ州の高官たち (31) 「アジャ州の高官で、パウロの友人である人たちも、彼に使いを送って、劇場に入らないように頼んだ。」

騒動は広がり、クリスチャンのガイオやアリストアルコも捕らえられて、劇場の方になだれ込んで行ったのです。パウロもそこに入って行こうとしましたが、弟子たちがそれを制止しました。また、この節にあるように、アジャ州の代表者として選ばれたローマ帝国側の高官や、パウロの友人たちも、使いを送って、その劇場の中に行かないように、パウロに伝えました。

②混乱状態 (32) 「ところで、集会は混乱状態に陥り、大多数の者は、なぜ集まったのかさえ知らなかったで、ある者はこのことを叫び、ほかの者は別のことを叫んでいた。」

混乱というのはこういう状態をさすのでしょうか。広い劇場に集まった人々の大多数が、集まっている理由もわからないでいたのです。ですから、そこにいるある人はこの事を、また他の人はこの事をと、勝手なことを話す有様でした。

③エペソ人達の主張 (33～34) 「ユダヤ人たちがアレキサンデルという者を前に出したので、群衆の中のある人たちが彼を促すと、彼は手を振って、会衆に弁明しようとした。しかし、彼がユダヤ人だとわかると、みなの方がいっせいに声をあげ、『偉大なのはエペソ人のアルテミスだ』と二時間ばかりも叫び続けた。」

アレキサンデルという人が何を言ったのかはわかりません。ユダヤ人だからと言って、クリスチャンのパウロを応援したのでしょうか。しかし、それはあまり考えられません。エペソの人々は、彼がユダヤ人だと認識すると、自分達が信じているのは、「アルテミス神殿の神だ!」と、なんと二時間も叫び続けたというのです。

2. 書記役の訴え (35～37節)

①町の書記役 (35) 「町の書記役は、群衆を押し静めてこう言った。『エペソの皆さん。エペソの町が、大女神アルテミスと天から下ったご神体との守護者であることを知らない者が、いったいいるのでしょうか。』」

町の書記役というのはエペソの法を扱う重要な官僚でした。彼は暴走する群衆を静めて言ったのです。エペソの町が、大女神アルテミスの名



アルテミス神殿の想像図

声を守り、さらに天から下った神体を守っているということを知らない者がいるでしょうか、と訴えかけました。

- ②自分たちの確認 (36) 『これは否定できない事実ですから、皆さんは静かにして、軽はずみなことをしないようにしなければいけません。』

それは、誰も否定できないことなのですよと言って、エペソの人々の心に昔からある信仰を確認します。その上で だから 騒いだりせず 静かにして、軽はずみのことをしてはならないと促します。

- ③クリスチャンのした事 (37) 『皆さんがここに引き連れて来たこの人たちは、宮を汚した者でもなく、私たちの女神をそしった者でもないのです。』

皆さんが引き連れてきた人(クリスチャンのガイオとアリストルコのこと)は、アルテミス神殿を汚したわけでもなく、その女神をそしったわけでもない、と書記役は冷静に伝えました。

3. 書記役の説得 (38~41 節)

- ①文句があるのなら (38) 『それで、もしデメテリオとその仲間の職人たちが、だれかに文句があるのなら、裁判の日があるし、地方総督たちもいることですから、互いに訴え出たら良いのです。』

さらに、騒動の発端にあったデメテリオと仲間の職人たちの主張への取り扱いに話しを移します。彼らに文句があるのなら、それを巡回裁判に出せばよい。その日は市民会があって、州の総督もいるのだから、そこに訴えると良いのだと伝えました。

- ②正式に議会で (39) 『もしあなたがたに、これ以上何か要求することがあるなら、正式の議会で決めてもらわなければいけません。』

ここからは、書記役の警告です。ここに集まっている人々が、さらに要求事項があるなら、このように大騒ぎをするのではなく、定例日に行われる議会にはからなければなりませんと厳しく伝えました。

- ③解散を促し (40~41) 『きょうの事件については、正当な理由がないのですから、騒擾罪に問われる恐れがあります。その点に関しては、私たちはこの騒動の弁護はできません。』 こう言って、その集まりを解散させた。

そして、さらにはっきりと警告します。この騒動事件に関しては、正当な理由が見つけられないこと、このままではローマ当局によって騒擾罪に問われる可能性があること、そのことについては書記役は弁護ができないことを伝えました。書記役はこのように説得して、人々を解散させたのです。

《結論》 今朝の聖書箇所から主の備えと守りを覚えていきたいのです。

第一は、アジア州の高官たちも、パウロの弟子たちとは違う側面から、パウロに劇場に行くことを止めたことについてです。彼らはアジア州の代表者として選ばれたローマ帝国側の高官たちです。そんな彼らが、使いを送って、劇場の中に行かないように、パウロに伝えたのです。ローマ政府につながっている彼らが、キリスト教会側に対して、このように擁護する態度をとっていることに驚かされます。主なる神が、こうした人々の心情に働きかけられていたのです。

第二に、エペソの書記役についてです。彼はエペソでは最も重要な公務員でした。法律を公布する行政官でした。エペソ人ですが、ローマの行政庁と連絡をとる立場でもありました。ですから、彼にはエペソ市民を、ローマの権限で刑罰を与えることができたのです。その書記役が、混乱する劇場の真中に立って、彼らに訴えかけたのです。彼がまず民に伝えたのは、エペソの町がアルテミス神殿とその神体の守護者であることが確かなこと。第二にだからこそ、静粛にして、軽はずみな行動をしないように警告しました。第三に、そこにいるクリスチャンたちは宮を汚しせず、女神をそしったりもしていないこととして、クリスチャンを擁護しているのです。そして、デメテリオたちに不服があるのなら、裁判の日に訴えよと言ったのです。思わぬ、書記役からの援護射撃があって、クリスチャンたちは守られたのです。そして、これはとりもなおさず、パウロがその地において守られたことにもなります。「主の山に備えあり」です。

第三に、私たちへの適用として考える時に、私たちの関わっている環境にあっても、クリスチャン以外の人々から助けられることがあります。しかし、大事なことは、私たちは助けられるときに、助けてくれる人の信仰や思想に身を委ねることをしないことです。この書記役も、エペソの町がアルテミス神殿とその御神体をエペソの町なのだと断言していることからしても、キリスト教信仰とは相容れないのです。キリスト教信仰に理解し示し、擁護してくださる人々に会う時には、その人の背後にいて擁護する心を与えておられる主を、ますます覚えることです。私たちの主が、クリスチャンでない人の心にも働きかけることがあります。その時に大事なことは、世の力におののくのではなく、そこに働きかけてくださっている主を崇めることです。もちろん、助けてくださる人々の心に敬意を払い、感謝することを忘れてはなりません。パウロにしても、このような人々の配慮がなければ、次の一步を踏むこともできなかったのですから。「行くにも帰るにも守ってくださる」(詩 121) 主がともいてくださることを、覚えて歩みましょう。

パウロは様々な試練に遭遇しながらも、「もし、どうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります」(第二コリント 11:30)と告白しています。そして、アレタ王の代官が、捕らえようとして、ダマスコの町を監視していた時に、城壁の窓からかごでつり降ろされて、助けられたという体験を伝えています。試練を乗り越えさせてくださる主(1コリント 10:13)に信頼していきましょう。主は必要な時に、必要なものを備えてくださる(創世記 22:14「主の山に備えあり」(アドナイ・イルエ))ということ覚えていきましょう。